

新島襄はなぜ、函館から 国禁を犯して海外に脱出したのか？

—『ロビンソン・クルーソー』と新島襄—

吉 田 曠 二

この報告の問題点：「生か、死か？」函館脱出の5つの 要因と協力者ハーディ夫妻のハートを射止めた理由

1864年6月14日（陰暦）、新島が函館からベルリン号で海外に脱出してから、今年（2014年）は150周年に当たる。その後、彼が1年余の航海を経て、地球の向こう側の北米大陸ボストンに到着したのは1865年7月20日（陽暦）であった。当時、23歳、腰に帯びた両刀以外、無一文に近い青年がなぜ、どのようにして函館から脱出できたのか？このテーマは各種の新島襄伝のクライマックスの一つである。世界的偉人となった人の生涯は、壮年になり、功成り名を遂げてからクライマックスを迎えるが、新島の場合は、無名の青年として、若き日の脱出の場面がすでにその人生のクライマックスの最初的一幕となっている。その理由はなぜか？

そのシーンに登場する無名の新島の姿が人々を感動させるからである。新島は後に演説の名手となり、その演説と思想でも、米人と日本人を感動させるが、若き新島はまず国禁を犯した脱国という勇氣ある行動で、今でも私どもを感動させてくれる。だから彼の函館脱出は世界の文豪が描く文学作品のテーマにもなりうるほどの迫力あふれる名場面である。

幸いなことに新島はこの脱国の理由について、幾種類かの貴重な記録を書き残してくれている。英文の記録では、“Why I departed from Japan”と“My

younger days”があり、日本語では「航海日記」や「函館紀行」、「函館よりの略紀」など、その他、若き新島の（友人宛英文の書簡や家族宛）書簡でも、間接的にその脱出の理由に触れたものがある。これらの資料は第一次資料として、各種の新島伝に紹介されている。私も本日の報告では、新島の書いたこれらの資料を活用しながら、最初に若き新島の函館脱国を簡単に追跡し、もうひとつ21歳のとき、新島が読んだ聖書と冒険小説『ロビンソン・クルーソー』からも新島の脱国の動機とその後の運命を切り開いた姿を重ねて考察してみたい（このくだりは主としてエピローグで考察する）。

(1) 新島はなぜ函館から脱出したのか？ 成功の秘訣：キーワードは国際都市函館

第一の問題点は、新島がなぜ函館を脱出の地点に選んだのかである。その理由のひとつは彼が20歳の時、備中松山藩が所有する快風丸で、浦賀から松山にはじめて航海したこと、この航海で新島は初めて人間の自由を味わった、この自由を得たいという強い欲望のために彼は藩主を無視して、不服従の気持ちに駆られたこと、それからこの航海で、松山藩の塩田虎尾¹⁾を友人にしたことがあげられる。もう一つ新島が函館を目指した理由には、「脱国の理由」のなかで、「英語で聖書を学ぶために、函館に行ってイギリス人かアメリカ人の聖書の教師を得たい」と書いていることから、すでに幕末の国際都市・函館の事情を知っていたことが推測できる²⁾。若き新島は江戸湾に浮かぶオランダの黒船をみて、その高度な文明を生み出した西洋に憧れたが、その当時すでに函館が国際都市で、そこには外国人、とくに英米人がいることを事前に知っていたからであろう。二年後、江戸で偶然松山藩の侍塩田虎尾に出会って、快風丸が函館、サガレンに向かうという最新情報を知って即座に函館行きを決意したことになる（写真1、2 函館の五稜郭と幕府の奉行所）。

新島襄はなぜ、函館から国禁を犯して海外に脱出したのか？



写真1 函館奉行所

幕府は1864年6月15日五稜郭に新しい奉行所を開設した。その竣工式の朝、新島を乗せたベルリン号は函館湾から出航した。(五稜郭発行絵葉書)



写真2 五稜郭
(筆者撮影)

(2) 新島の冒険心を刺激した『ロビンソン・クルーソー』

『ロビンソン・クルーソー』と言えば、18世紀英国の文豪ダニエル・デフォーの名作である³⁾。21歳の新島がこの小説を読んだことは、“My younger days”にも紹介されている。

この作品は幕末の日本では、黒田麴廬(近江膳所の蘭学者)の訳本があるが、新島はその訳本を江戸で友人から借りて読んでいる。この本は幕府の検閲を配慮して(あるいは表現が薄められていて)、新島は聖書の理解よりもむしろクルーソーの物語によって冒険心を刺激されたものと思われる。この小説では、クルーソーは家族、特に父親の反対を押し切って、冒険の旅に出て、その船がカリブ海で遭難し、孤島でひとり生き延びる勇氣

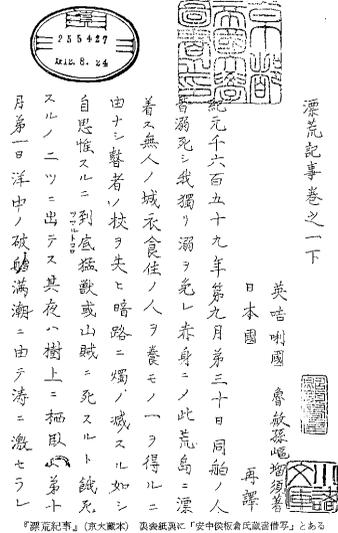


写真3 新島が読んだと思われるデフォーの小説『漂荒記事巻之一下』黒田麴廬の訳本(京都大学図書館所蔵)

をもち、さまざまな苦難に挑戦する。この物語は新島の海外脱出の勇気、つまり青年期の新島に家族の反対を乗り越え、脱国する勇気を与えた作品である（写真3）。

(3) 脱国前、新島は聖書から何を学んでいたか？

21歳の新島が江戸で友人杉田廉卿から借り出して読んだ三冊の本の内一冊は聖書であった。その当時、聖書は発禁本で、「それを読んでいることがわかると、幕府はその家族全員を磔に処す」恐れがあった。しかし新島はあえて聖書を読んだのである。新島いわく、「聖書を読むこと、それは徳川の法で禁止されていた『目上の者を殺した罪、子供が親を殺した罪、聖書を読んだ罪』この三つが同罪」（“Upright against God” p.36）で日本では人の首がはねられた。だから幕府の役人に見つかれば、当然ながら誰もが斬首の処罰を受ける運命にあった。それでも新島は危険を冒して聖書を読んで、天父：宇宙創造の神の存在を発見した。しかしこの勇気はどこから生じたものか？

(4) 日本人を籠の鳥にした徳川幕府への怒りと反抗

徳川幕府は三代将軍家光以来、鎖国令を布いて、日本人の海外渡航を禁止した。その鎖国制度に怒り心頭に発した新島はこう指摘した：なぜ「幕府は我々を自由にしてくれないのか。幕府は日本人を『籠の鳥』にした。日本の民を井戸の中の蛙にした。」 But the government's law neglected all my thoughts, and I cried out myself: Why government? Why not let us be freely? Why let us be as a bird in a cage or a rat in a bag? Nay! We must cast away such savage government. (“Upright against God” A Sketch of Joseph Hardy Neeshima by Phebe Fuller McKeen)

この叫びは、函館から脱国して一年余経過して、ボストンに到着後も新島の意識を支配していたもので、これは自由への憧れが新島の命がけの脱出の要因であったこと、それには時の腐敗した政権・徳川幕府を打倒する意図も含まれていたと理解すべきであろう。

新島襄はなぜ、函館から国禁を犯して海外に脱出したのか？

(5) 函館滞在 55 日間の行動：キーマンとの出会い

新島はどのようにして、北の国際都市函館から脱出できたのか？その秘密を解くためには、函館での若き侍との出会いを考察することが一番の決め手になろう。新島の函館行きの目的は「英語で聖書を学ぶため、英国人か米国人の教師をみつける」ことであったが、新島は函館上陸後、まず武田斐三郎⁴⁾の塾を二度、訪問した。しかし武田が不在で、菅沼からロシアの司祭ニコライが日本語教師を求めていることを聞き、英学を学習するため、ニコライ⁵⁾に紹介を依頼した。しかしニコライは新島に英語の教師を紹介しただけで、自らは英語を教えなかった。ニコライは新島から古事記を学んだ。それから新島はニコライに海外脱国の心中を明かしたが、ニコライは協力しなかった（6月）。そのころ、函館ではポーター商会に勤める富士屋卯之吉⁶⁾（富士卯之吉）と出会い、英語ができる卯之吉の手配と尽力で、ベルリン号の船長・セーボリーに出会うことができた。この人々との出会いが新島の函館脱出の成功のカギになる。福士は英語に堪能な青年で、後には函館の英学者として、その先駆的な役目を果たす人になるが、その福士が新島を紹介したセーボリー船長も米国の民間人で義侠心のある船乗りであった。この二人の命がけの協力が新島の函館脱出の成功のカギとなった。

新島はこの二人の協力者のことをその後も忘れていない。福士宛には上海から英文で第一号の書簡を送っているほどである。

しかし新島の英語力は、福士ほどには完ぺきな水準に到達していない。航海の途中、香港では街で聖書を購入、その代金は持参した刀をワイルド・ローバー号のテラー船長に売ったお金で購入したが、聖書の理解力もまだ完ぺきではなかった。しかし約一年後ボストンに到着後、四日目に新島はワシントン通りの本屋で『ロビンソン・クルーソー』の英語版を一元半で購入した（〔航海日記〕7月24日付及びマッキーン女史著“Upright against God”）。

この英語版は偶然とはいえ、ボストン到着後の新島の精神的な心の支えになった。

エピソード

－英文の『ロビンソン・クルーソー』で二度目の道を開く

ボストンに到着後の新島は自分の将来を予測もできない、四面楚歌の境遇で、ただひとり港に取り残された。運命の人、ボストンの恩人ハーディ夫妻と出会えるまで、約3ヵ月間、新島の周辺には異国の地で頼れる人がいなかった。周辺には荒くれ男がいるのみ、彼らから新島は、「日本に帰れ」と忠告されている。しかし新島は脱国者で安心して帰国できる祖国はなかった。そのとき新島の懐にはボストンで購入した『ロビンソン・クルーソー』が一冊入っていて、その英語版を毎夜、むさぼり読んだのである。クルーソーも南海の孤島で8年間、孤独と戦いながら、祖国に戻る機会はなかった。ボストンは大都会であっても新島は孤島にいるクルーソーと同様に孤独であったに違いない。この姿は新島がアンドーヴァーで出会った米人マッキーン女史（安息日学校の教師）と友人フリントによっても記録されている⁷⁾。

この二人は新島の英語の理解力がまだ十分ではなかったこと、とくに友人のフリントは新島が熱心に英語で一冊のノーベルを読んでいたこと、マッキーン女史も新島がファイリップス・アカデミー時代に『ロビンソン・クルーソー』を読んでいたことを証言している。

1865年、10月に新島に初めて出会ったハーディ夫妻は目の前にいる一人の日本の若者をどのように判断したのか？ハーディは新島が父母を捨て祖国を捨て、ただ天父の命令に従う青年であることを見破った。すでに新島の心は祖国日本にない、宇宙を支配する神に従う人間であること、つまり新島が精神的にキリスト教の世界にルビコン川を超えてとびこんできた青年であることを鋭く発見したと考える。

ハーディ夫妻から脱国の理由について質問された新島はその信仰心、意識の変革をどのように伝えたのか？聖書で理解した英語より、むしろ『ロビンソン・クルーソー』に登場する聖書の描写が新島の英語表現を助けたものと私は考える。

クルーソーは聖書から何を学んだのか？難破船から偶然に聖書を見つけ

新島襄はなぜ、函館から国禁を犯して海外に脱出したのか？

て、南海の孤島でクルーソーが学んだのは、キリスト者として安息日を守る大事さを知り、さらに邪教を排して唯一、宇宙創造の天父にのみ従う自分を発見したことである。このクルーソーの精神的変革を新島は自分が理解したクルーソー物語の言葉として、ハーディ夫妻に英語で伝達できたものと考えられる。

そこでマッキーン女史がファイリップス・アカデミー時代の新島から、聞かされた告白を紹介してみよう。その有様は新島がワシントン通りの本屋で『ロビンソン・クルーソー』に再会した直後の場面で、クルーソー物語が新島にもたらした影響力の強さを次のように伝えている。

マッキーン女史いわく：「キャプテン（テラー船長）は新島に街で遊ぶように小銭を与えたが、新島はワシントン通りの書店でみつけた『ロビンソン・クルーソー』をそのお金で購入した。『ロビンソン・クルーソー』から新島はまず神に祈ることを学んだ。英語で書かれた聖書（New Testament）をジョーはまだ完全に理解していなかった」「この難破したロビンソン・クルーソーがその苦難の中で祈りを捧げたこと」「そこでジョーは毎夜、就寝するとき“神に祈りを捧げ、みじめな境遇に私を投げ込まないで欲しい、どうぞ私の偉大なる志を達成させて欲しい、と祈った」（英文“Upright Against God” pp.47～49）

ここでマッキーンはこの青年の心が偶像崇拜から転じて、神が本当の神に従うように促したこと、つまり「汝は祖国からも汝の親族や家からも脱出して、神が汝に導く土地に入るようにすすめたこと、ジョーもそれを拒むことがなかった」とマッキーンが書いている。この話は地球の裏がわから送り出された青年を船主が受け入れて、即座にその生活を援助し教育を受けさせることになった理由を説明している。

その後、マッキーン女史からこの話を聞かされた新島はマッキーン女史にこう伝えている。

「私は最初、船長（テラー）からこの話を聞いたとき、跳びあがって、両眼から涙を流した。なぜなら、私は船長に感謝し、神が私を見捨てなかったことに感謝したからである」（“Upright Against God” pp.46～49）。新島のこの告白はまさに Unseen hand の導きを神に感謝したクルーソーの祈りと同

一の告白であろう。

筆者には、クルーソーの孤独な冒険の旅が新島の函館脱出の旅と同じに見える。またクルーソーの父親の息子に対する諫めの言葉は、新島の祖父弁治と父親民治の諫めと類似するものであった。なお、新島がハーディ夫妻の心を射止めて、その人生の未来を自ら切り開いたのは、簡単なわかりやすい英語で書かれた『ロビンソン・クルーソー』の言葉を新島が自分の言葉にかさねてハーディ夫妻に自己紹介できたからと思われる。その意味で、クルーソーの物語は、孤独な新島に将来の展望を与える指南書となり、深く聖書を理解する基礎知識になったものであろう。そう考えると『ロビンソン・クルーソー』は二度、新島の針路に影響をもたらした。一度目は日本語訳の『ロビンソン・クルーソー』で、函館から脱国し、二度目は英文原書の『ロビンソン・クルーソー』でハーディ夫妻のハートを射止めたのである。

世界の古典は時と所を乗り越えて人を動かす。17世紀、英国で刊行された“Robinson Crusoe”は、19世紀の日本の青年を動かす原動力になったのである。

注

1) 塩田虎尾：新島の友人

1842（天保13）年生まれ。新島が属する安中藩の本家にあたる備中松山藩主板倉勝静の家臣。新島より一歳年上。1860（万延元）年、藩主の命令で、西洋砲術習得のため江戸で江川太郎左衛門の塾生になる。同年、松山藩が米国製のスクーター船快風丸を購入すると、塩田はその船を備中玉島まで廻航する任務を与えられた。その航海に新島が同行した。それ以後、塩田と新島は親しくなり、函館から密航の際も、神明社の沢辺数馬の家で別れの杯を交わして、それから、新島は塩田の従僕に変装して、築島のアレキサンダー・ポーター商会に向かった（「新島研究」46号森中章光稿）。これにより塩田も新島の脱国を幫助した侍の一人となる。

2) 幕末の国際都市函館：

1860年に函館を訪れた米人宣教師ヘボンの記録によると、函館（箱館）には外国人が約30名駐在、「ロシア、アメリカ、イギリスの諸領事館に属する人たちです」と書いている（『ヘボン在日書簡集』p.61）。当時の函館には、アレキサンダー・ポーター（イギリスのデント商会の支配人）も1859（安政6）年に函館に来

新島襄はなぜ、函館から国禁を犯して海外に脱出したのか？

ていて、同年には、大町で西洋料理店も開業されている。1864（元治元）年には、アキンド号も函館に入港し、製材工場の建設にとりかかり、昆布の取引も盛んで、そのシェアは貿易品の82パーセントになっている（千代肇稿「新島襄 日本脱出の背景」：北垣宗治編集『新島襄の世界』晃陽書房、1990年 pp.101～102）。

3) ダニエル・デフォー：18世紀に活躍した英国の文豪

ダニエル・デフォーについては、その研究書として塩谷清人著『ダニエル・デフォーの世界』世界思想社刊行がある。その著作では『ロビンソン・クルーソー』はデフォーが59歳の時の作品で、「その時代（1700年代）に生きる人間の現実的な意識を反映した小説」（p.302）と説明している。デフォーは自ら貿易に関係していて、船乗りに関心をいただき、18世紀の英国で出版され、流行していた通常の航海記に飽き足らず、独自の視点から書き上げた冒険小説である。

その内容も単なる冒険談でなく、デフォーの精神史ともいえる。その第1部～第3部の表題と刊行年度は次の通りとなっている：

第1部 The Life and Strange Adventures of Robinson Crusoe 1719年4月出版

第2部 The Farther Adventures of Robinson Crusoe 1719年8月出版

第3部 Serious Reflections during the Life and Surprising
Adventure of Robinson Crusoe 1720年8月出版

この3部作の特徴は「従来の騎士道物や宮廷ロマンスなどと違い、主人公のクルーソーが中産階級の出身で、現実を踏まえた彼の生き様が描かれ…社会における個人の生き方が問われた」作品で、塩谷氏の説明では「生きるか死ぬかという厳しい現実に直面して、どう生きぬいていくかという設定」になっている、と指摘している（p.304）。

しかも第一部では、孤島に聖書を持ち込むシーンから、主人公のクルーソーの厳しいサバイバル生活の姿が聖書の受容に重ねて描き出されている。そのシーンが新島に与えた影響はデフォーの問いかけとして、強烈な印象を新島に与えている。

第1部と第2部は冒険談と聖書の受容の物語りで、第3部はその聖書受容の精神史の趣が強い。

4) 武田斐三郎：

1827（文政10）年生まれ、伊予の大洲藩士武田敬忠の次男、大阪の緒方洪庵の適塾で学ぶ。

後年、江戸に出て伊東玄朴、佐久間象山から蘭学、航海、築城、兵学を学んだ。1854（嘉永7）年以降、函館奉行の下で、松前蝦夷地御用となる。新島は函館到着後、安中藩に願い出の通り武田塾で航海術と兵学を学ぶ目的で、その塾を

訪問したが、塾頭の武田が不在で、会うことが出来なかった。しかしそのことがかえって新島には幸いであったと思われる。武田は幕府の高級官吏で、新島の脱国を幫助できる立場ではなかった。

5) ニコライ (俗名はイワン・ジミートリエヴィッチ・カサトーキン) :

在日ロシア領事館付主任司祭。1836年生まれ、来日は1861年6月、新島が函館に上陸する3年前であった。ニコライの職務は在日ロシア領事とその家族や随員たちの信仰を司る役目で、公務上からみて新島の海外脱国に協力する立場ではなかったと思われる。新島に出会ったのは28歳であった。ニコライは知識人で、その著書に『ニコライの見た幕末日本』中村健之介訳 講談社学術文庫がある。

6) 富士屋卯之吉 (別名：福士卯之吉) :

新島は英文の自伝“*My Younger Days*”でその恩人の卯之吉をこう回想している。

福士は「函館で私に英語を教えてくれた。二、三度、彼に会った後、私の長く胸に秘めていた計画を彼に打ち明けた」「彼はそれを大変喜び、心に留めておくことを約束してくれた」。福士は新島の心の秘密を聞かされてから、「一週間もしないうちに、祖国を離れる準備を即刻するように」新島に告げた。この青年の協力で新島は、急転直下、その望みがかなえられる。

なお、アーサー・シャバアーン・ハーディはその著“*Life and Letters of Joseph Hardy Neeshima*” (1891) で、函館を脱出する前日、福士がどのような助力してくれたのかについて、こう書いている。「(新島は) 外国人居留地にいる友人(福士)を訪れた。その友人は次の日の朝、上海に向けて出港する用意をしているアメリカの船に私を連れていくことに同意していた。彼は、ホット・レモネードを飲むように準備してくれた。遠くで犬に吠えられ、下駄を脱ぎ捨て、監視人に見つかった」。シャバアーン・ハーディは福士の導きによる新島の脱国を *unseen hand* の導きと形容している (同書英文 31 p)。

7) ミス・フラー・マッキーン (1821~80) :

最初の新島伝を英文で書いた女性。北垣宗治名誉教授はその大著『新島襄とアーモスト大学』(山口書店刊)でマッキーン女史について、詳しく紹介している。北垣氏は、マッキーン女史(妹のフラー)と新島がアンドーヴァーで会会うのは1865年11月(つまり新島がハーディ夫妻の庇護の下でアンドーヴァーのファイリップス・アカデミーに入学した翌月1865年10月30日の翌月)であったと推定している(北垣：前掲書 p.80)。とすると、新島の米国生活の初期のころで、日本から生きるか死ぬかの航海をした後、さらにボストン港での80余日の不安で孤立の生活をして、まだ日が浅いときであったことになる。

新島襄はなぜ、函館から国禁を犯して海外に脱出したのか？

このとき新島はその新鮮な記憶からボストンの街で購入した『ロビンソン・クルーソー』について、影響されたことに触れていることは特筆に値する。なお、マッキーン女史の新島伝の英文書名は“Upright against God: A Sketch of Joseph Hardy Neeshima” By Phebe Fuller McKeen, Boston, D. Lothrop Company, 1890である。北垣氏の正確な翻訳は『新島襄とアーモスト大学』に収録されている。北垣氏はこのマッキーンの新島伝の文言が90パーセント、アーサー・シャバアーン・ハーディの『ライフ・アンド・レターズ』に類似していると指摘しているが、私はマッキーン本の新島の言葉が米国での最初の告白であることに大きな価値をみとめたい。マッキーンに語りかけた新島の言葉がその回想の第1号になる（吉田曠二記）。

なお、この論考は、「同志社タイムス」に2014年5月から毎月連載している「ロビンソンクルーソーと新島襄」と合わせ、一読してくださると幸いです。

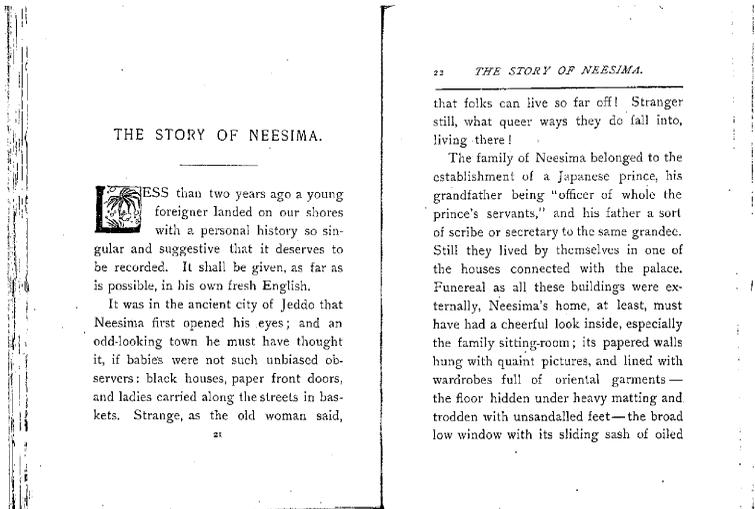


写真4 THE STORY OF NEESIMA

この新島伝の冒頭でマッキーン女史はボストンに上陸後2年も過ぎていない時期に「新島が語った新鮮な英語のまま」「その個人史」を記録すると書いている。脱国の理由について新島自身が告白した重要な証言である。しかし、マッキーンはこの告白を公表すれば新島の身に不利益となることを心配したものか、自分で公表することはなかった。（“Upright against God” 同志社大学図書館蔵）



写真5 フィビー=フラ=マッキーン (右)

フィリップス・アカデミー時代の新島の安息日学校の教師。
“Upright against God: A Sketch of Joseph Hardy Neeshima”を
記録した女性。左は、フィビー=フラ=マッキーンが記録し
たものを1890年に出版した姉のフレナ=マッキーン。
(Susan M. Lloyd, A Singular School (Andover : Phillips
Academy, 1979))